

# 2022年 6月 19日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「癒された人」ルカによる福音書 5章17-26節 原真由美

## ◆中風の人をいやす

5 17 ある日のこと、イエスが教<sup>おし</sup>えておられると、ファリサイ派<sup>は</sup>の人々と律法<sup>りっぽう</sup>の教師<sup>きょうし</sup>たちがそこに座<sup>すわ</sup>っていた。この人々は、ガリラヤとユダヤのすべての村、そしてエルサレムから来たのである。主の力が働<sup>はたら</sup>いて、イエスは病気をいやしておられた。18 すると、男<sup>おとこ</sup>たちが中風<sup>ちゆうふう</sup>を患<sup>わづら</sup>っている人を床に乗せて運<sup>はこ</sup>んで来て、家の中に入れてイエスの前<sup>まへ</sup>に置<sup>お</sup>こうとした。19 しかし、群衆<sup>ぐんしゅう</sup>に阻<sup>はば</sup>まれて、運び込む方法<sup>はうほう</sup>が見つからなかったため、屋根<sup>やね</sup>の上<sup>うへ</sup>で瓦<sup>か</sup>をはがし、人々の真<sup>ま</sup>ん中のイエスの前<sup>まへ</sup>に、病人<sup>びやうにん</sup>を床<sup>とこ</sup>ごとつり降<sup>お</sup>ろした。20 イエスはその人たちの信仰<sup>しんこう</sup>を見て、「人よ、あなたの罪<sup>つみ</sup>は赦<sup>ゆる</sup>された」と言<sup>い</sup>われた。21 ところが、律法学者<sup>りっぽうがくしゃ</sup>たちやファリサイ派<sup>は</sup>の人々はあれこれと考<sup>かんが</sup>え始<sup>はじ</sup>めた。「神<sup>かみ</sup>を冒瀆<sup>ぼうとく</sup>するこの男<sup>おとこ</sup>は何者<sup>なにもの</sup>だ。ただ神<sup>かみ</sup>のほかに、いったいだれが、罪<sup>つみ</sup>を赦<sup>ゆる</sup>することができるだろうか。」22 イエスは、彼ら<sup>かれ</sup>の考<sup>かんが</sup>えを知<sup>し</sup>って、お答<sup>こた</sup>えにな<sup>な</sup>った。「何を心<sup>こころ</sup>の中<sup>なか</sup>で考<sup>かんが</sup>えているのか。23 『あなたの罪<sup>つみ</sup>は赦<sup>ゆる</sup>された』と<sup>い</sup>うのと、『起き<sup>お</sup>きて歩<sup>ある</sup>け』と<sup>い</sup>うのと、どちらが易<sup>やす</sup>しいか。24 人の子<sup>ひと</sup>が地上<sup>ちじょう</sup>で罪<sup>つみ</sup>を赦<sup>ゆる</sup>す権威<sup>けんい</sup>を持<sup>も</sup>っていることを知らせよう。」そして、中風<sup>ちゆうふう</sup>の人に、「わたしはあなたに言<sup>い</sup>う。起き<sup>お</sup>き上がり、床<sup>とこ</sup>を担<sup>か</sup>いで家<sup>いえ</sup>に帰<sup>かえ</sup>りなさい」と言<sup>い</sup>われた。25 その人<sup>ひと</sup>はすぐさま皆<sup>みな</sup>の前<sup>まへ</sup>で立ち上<sup>た</sup>がり、寝<sup>ね</sup>ていた台<sup>だい</sup>を取り上<sup>あ</sup>げ、神<sup>かみ</sup>を賛美<sup>さんび</sup>しながら家<sup>いえ</sup>に帰<sup>かえ</sup>って行<sup>い</sup>った。26 人々は皆<sup>みな</sup>大<sup>お</sup>変<sup>へん</sup>驚<sup>おどろ</sup>き、神<sup>かみ</sup>を賛美<sup>さんび</sup>し始<sup>はじ</sup>めた。そして、恐<sup>おそ</sup>れに打<sup>う</sup>たれて、「今日<sup>きょう</sup>、驚<sup>おどろ</sup>くべきことを見<sup>み</sup>た」と言<sup>い</sup>った。

聖書 新共同訳(C)日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987,1988

2年前のコロナのパンデミックが始まり1年もたった頃私は「NHKテキスト100分で名著」というシリーズのイギリス人のデフォーという作家の「ペストの記憶」をいうテキストを読みました。デフォーは『ロビンソン・クルーソー』を書いたクリスチャンのイギリス人作家でこの物語はフィクションとなりますが、イギリスのロンドンで実際にペストが起り多くの人々がその犠牲になった事実に基づいて書かれています。デフォー自身もペストを生き抜いています、そしてこの「ペストの記憶」を書いたのですが、パンデミックが収まった頃のロンドンのその後の様子を記録になるような事実が記載されています。

疫病の死者のために次々と埋葬地が造られましたが、一段落した後、そのことを忘れた人達によって、別の用途に使われる状況が生まれました。新しい生活のために建物がどんどん建てられることになったのです。パンデミックが去ったあとでしたが復興に燃えていたのです。建物の基礎工事に地面を掘るとまだ元の姿をとどめている遺体も現れたのだというのです。その様子はペストの悲劇をすぐに忘却したロンドン市民を告発するかのよう描かれています。私たちの中にもメディアを通じてウクライナでの惨劇で多くの人々が埋葬される様子を見た人もいるでしょう。しかし、社会はコロナやウクライナへの侵攻による不安とカオスがまるで一段落したかのように急いでどこかへ進んでいこうとしているように見えます。

今日はルカ福音書の5章17節からイエスが中風の人を癒すという物語を考えてみました。マタイ福音書、マルコ福音書にも同様な物語が書かれているように、中風の人を癒すはマルコによる福音書が原型となっており論争物語ともいわれています。そしてこの物語にイエスとファリサイ派の人々の対立の様子が伝えられています。ルカ福音書ではその緊張感の中でイエスが4人に連れてこられた自力では歩くこともできない中風の人に対しての罪の赦しから始まっています。そして次に病を癒しイエスが

罪を赦す神の子であると主張します。このことがファリサイ派の人々から反感を買い、5章からついに十字架への死にまで続いていくこととなります。ルカ福音書ではイエスを信じる4人の人の行動が一番よく書かれています。ここに焦点をあてて考えてみると4章の31節からイエスの奇跡物語を続けて書き、イエスのメシア(救い主)としての権威と力の現れを示してイエスを信じる4人は人間の力ではどうにもならない事でも何とかして今近くに来ているイエスにこの人を会わせるために、中風の人を家から床ごと運んでやってきていました。群衆のためにイエスの前にすなりとその人を見てもらうことは出来ませんでした。4人はあきらめませんでした。何とかして今近くに来ているイエスにこの人の病を治してほしい、イエスを通じて生きる希望を持ってほしい、この思いはついに屋根をやぶり、イエスに出会うことを可能にしました。イエスの罪の赦しの宣言である「起き上がって、床を担いで家に帰りなさい」の言葉の通りその人はすぐに起き上がるまでに元気になり、それまで彼を縛り付けていた床をひき払い、担いで神への信仰を示したのでした。主イエスへの信仰によって忘れられようとする人々や出来事のために祈りと力を合わせた格闘が神の救いに与っていききました。

最初にお話したロンドンにおけるペストの忘却は人のさかさが限界を示していますが人の罪を赦すためイエスは自らの十字架を信じることを希望を生み出すことを示されました。社会の早い移り変わりの中でイエスが私達を十字架の死に至るまで愛してくださっている、その福音に私達自身もイエスに出会い、罪の赦しと生きる希望が与えられていることを信じて、立ち上がって人々を共にイエスへと導く者でありたい願います。